

第二海豹と雲

北原白秋

青空文庫

古代新頌

懸巢

飛べよ、みやまかけす深山懸巢、

神神はまた目ざめぬ。

磐が根に注連繩しめゆひきはり、

みてぐら幣帛みでぐらにしで結ゆひ垂れ、

真榊の、鏡葉の音さやさやに

うち清めて。

啼けよ早や深山懸巢、

みやまかけす

日は若し、かの稚神、

をさながみ

ひむがしはすでにかぎろふ。

菊盛り

をとめ
少女たち、黄菊には古代のかをりがあ

純粹に日本の寂びと気品がある。

ああ、この静かな菊の香かの苑そのに坐すわらう。

をとめ
少女たち、黄菊きぎくには九重のみけしきがある。

雲の上の日と月のにほひもする。

わかみかどい帝の御いきづかひが聞える。

をとめ
少女たち、黄菊には御鏡の明りがある。

森厳な賢所のみけはひも澄む。

くわうごうのみや
皇 后 宮も白い唐衣でお出ましになる。

をとめ
少女たち、黄菊には紫宸殿の午後が光る。

たかみくら
高御倉の金の鳳、玉ぎよくばん 旛の玉や、青地錦、

かうがうしいくわうろぜん黄櫨染の御袍ぎよはうも拝される。

をとめ少女たち、黄菊にはみくるま聖駕の軋みもこもる。

儀仗兵の旗槍もちらちらつづく。

ああさうして、日本の民族の新らしい祝福くが来る。

白き花鳥図

みづのうへ

しろがねのさざなみみれば

くれなるのはちすのにほひふむらむ。

つくばえのあかれるみれば、ささにごり、

おしどりのつがひのおよぎしぬばるる。

はてなきかもよ、よひよひの

みのわひろごるわがこころ。

風を祭る

冬の野

寂びつくす冬のながめを
小さき騎士馬駈けにけり。
いまぞ撤け、黄の飛行船、
消息の銀のちらちら。

十月の都会風景

十月、

大都会東京の午後一時二時、

日光がばかに白かった、立体的で。

市民は高層なビルディングの近景を、

いつもの通り右往左往してゐた、豆のやうに、

紅や青や紫や、パラソルの花、花、花、

自動車は疾駆した、旋廻した、昆虫の騒乱。

俺は空想した。ああ、この瞬間。

カーキ色の飛行船が爆発した、空の遥かで。

ぷすとただ光つて消えた点、——人、人、人。

十月、

誇張すると天を摩す屋上庭園の酒卓で
俺は古風な遠眼鏡を引伸ばしながら、
いつか失くした童心を探索してゐる。

珠数工の夜

良夜

よい花は空気をおくる。
落^パ下^ラ傘^シ月^ユから放^ウつ。
ああ、よいむすめよ、
今晚は笛が鳴ります。

孔雀

青い孔雀の白い脛、
月はその爪みがいてる。

扇の冠、
緑^エ玉^メ、
ラ^ラルド

そよりともせぬ闇のうち。

丈たけの濃こあを青をの、頬ほの横をを、
蒸うるみすは黝朱をの初夜の雲。

秘めよ、女性よ、すくなくも、

櫛は花時、夜の時。

ああ、月は射す、刻刻に、

光は膝を匍ひのぼる。

張れよ、孔雀よ、尾の羽根の
渦の金紗の濃むらさき。

夜ふかき墓地

夜^よふかき墓地に

音^{おと}して、

ささとし、

落つる花あり。

幻ならず、

雲間に

むらがる^{たま}霊の

しづまり。

闌^たけたり、

花はおどろく、

ささとし、

しきり^お落ちつつ。

梢よ、

月に照られて、

音あり、

暗き葉をうつ。

歩みつつ

聖上の御惱ごなう重らせたまひぬ。

ああ、日の暮、

寒かんもや霽はらに人ゆき消え、

立木くろずみ、

公園の辻、ポスト赤し。

聖上の御惱重ごなうらせたまひぬ。

街まちの方、

鈴、車、ラヂオ、人ごゑ、

此処にして立ち聴けば、ただ

何か深く、

また暗くとどろくなり。

聖上の御惱重ごなうらせたまひぬ。

靄もに点くイルミネーション、

高架線、

すれちがふ省線電車、

ああ、スパーク、

師走月、

風も吹く、風も吹くなり。

月に

おほぎみのみやまひおもし、
おほぎみのみやまひおもし。

いたいけの掌てをあはせつつ、
みつよつの子もぬかづきぬ。

寒かんの月てらす玉垣、
霜はただふりそそぐなり。

冬

貧しい冬の横丁でも
煙突のけむり夜よるになり、
窓に灯のつく安ホテル、
月の反そつたがなほとよい。
枯木は高い櫓です。

童話の月

白い月

白い月ゆゑ、

昼の千鳥もつれないか。

波よ、来い来い、

坊やが浜から招きます。

白い波ゆゑ、

白い月ゆゑつれないか。

月と童

うちの子はまだ一年と五ヶ月である。このごろ初めて月を識つた。

月は童わらべに笑ゑみかける。

まだ日中^{ひなか}ゆゑ遊べよと。

童^{わらべ}は月を観て遊ぶ。

はじめて白い月を観て。

波の音^とよ、

唐黍の毛のかすかな紅^{べに}よ、
遠いあなたの笛の音よ。

なのりそ

とこしへに君もあへかもいさなとり海の浜藻のよるとき

どきを
衣通姫

なのりそといふ藻を

まだ知らぬ女めの子こよ、

なのりそといふ藻は

小鳥がたべる、

いんや、さかながたべる。

さて、ほんたうはおまへが、

もうすこしたたねばわかるまい。

ほれ見い、真しんじゆ珠じゆいろの月が出てゐる。

月に飛ぶもの

月の光がさしました。

枯れた葡萄に、

日時計に。

月の燻^{いぶ}しになりました。

ちらばる色も、

縫ふ影も。

月に消え消えぎ飛ぶものよ。

ほの紫の

連れ鳥よ。

月の遙かになりました。

見果てぬ夢よ。

あの頃よ。

月夜

澄すみきつた
中ちゆうてん
天てんに

めり込んだ小^ちひさな満月、
白孔雀の尾だ、あの円光は。

起きて来い、坊や、
ふり仰^{あふ}げ、真^{まうへ}上を。
小^ちつちやい、小^ちつちやい坊や。

あけがた

ほのあかい蓮^{はす}の蕾は
露にすずしい水鳥の
胸ふくらめてゐるやうで、

ほのぼのと夜が明けまする。

『パン屋さん、お早う。』

『や、お早う。』

春朝

ほのかなるそよ風のうち、

わが頬早や春を感じぬ。

ああ、わが子よ、

庭に来よ、善きものや見む、

善き朝あした、善き善きしめり、

をさなかる蝶もうまれむ。
白き白き光して来む。

海豹と雲

童貞女

北海道函館の郊外、湯の川といふところにトラピストの
修女院があります。男子禁制の地です。天使園といふの
がそれです。

君こそは童貞女をとめよ。

イエズス キリストの花嫁。

あかつきの鈴蘭。

月の夜の亜麻。

君こそは童貞女^{をとめ}よ。

花^{はな}時^{とき}の天使園。

かがやきの歌^{うた}弥撒^{ミサ}。

アンゼラスの鐘の音。

君こそは童貞女^{をとめ}よ。

聖母マリヤの使^{つか}ひ女^め。

しろがねの微笑。

牛の乳^ちしぼりの木履^{サボ}。

君こそは修道女しうだうめよ。

ローマ、カトリックの寵児まなご。

燃えそめし聖燈みあかし。

葡萄棚の駒鳥。

君こそは君こそはまこと童貞女をとめよ。

昼見えぬ小ちひさき星。

向日葵を刈る間まも

主へかよふくちつけ。

蜃気楼

帆のかげか、

船か、そは、

体^{たい}はなし、

ただすすみぬ。

オホーツクの

海のはて、

時あかる

縁^{ふち}、しろがね。

たよりなし、

うそさむし、

かひやぐら

黄きに、うつつに。

神ありや、はた虚むなしや、

かもかくに

思ふ我のみ。

海うなぎか 阪や、

越えなづむ

波、波、波、
ただうねりぬ。

半島旅情

金色こんじきの

円き月

炎はなち、

山のきは

はや黒し、

冴えかへりて。

ただ畳む

入江、岬

波、漣。

遠遠し、

また近し、

この明さを。

松が根の

はだら雪
まだ凝りて。
こごり

人はゆく
ひたひたと、
影はつけぬ。

柘榴

柘榴は飛ぶ
人の手より、

空中の

円光と赤。

海の波たうたうとして

しろがねなり。

まぶしき、

このはるけさ。

真昼の、せつない

一瞬の拋物線。

月の出前

夜はくらい。沖はしづんで、
寄せ波の音ばかりする。

聞^ふけて聴く浪の音には
モーターのとどろきもする。
ぬか星に犬も吼えてる。
セメン樽ころがしてゐる。

月の出はまだまだまだ遅い。

横雲の断きれる寒さだ。

満みちしほ潮の闇の音には

饑そそる騒ざわめきがある。

ただ一つ、向日葵か、いな、

突堤つとの、線の灯ひあしだ。

ああ、浜だ、燐の眼をした

人がある。ほういほういだ。

渚

日の光波に照り満ち、

ゆくところ頻^{しぶ}吹かざるなし。

耿として

わたれ、むら鳥、

目路^{めぢ}遠く秋はあるなり。

春の蚊

身近な春

しろい一重の木いちごに、
朱のレットルのマツチ函、
昼は昼とて、
夜は夜とて、
身^みぢかな春のあかるさよ。

壺の一重の木いちごに、

擦るはマツチの燐のかず、

煙草ばつかり

すひほけて、

あそぶこころのけぶたさよ。

寝すごした朝

すぐろな壺の

もものはな、

ただ投げ挿した

枝の秀ほに、

青くチヨピリと葉が萌えて、
いつか毛ばだつ葺しべのつや。

『おおい、煙草だ。』

春が逝く。

四月十一日

向うに

あかいもものはな、

棕櫚の葉に

鳴る

日のひかり。

蛾はまだ

飛べず、

この窓の

硝子に

羽うらひつつける。

電球

寝室に

薄き紫、

書齋には

白の燭光。

竹、

竹、

竹、

一つほつとり、

北窓に

オレンヂの球^{たま}。

夜はふけぬ、

ねむれ、鶯、

春の雪

幽かに沁しむや。

卓上

青磁に金のほそきは

二三冊、鏡花全集、

しろい花、壺の木いちご、

蔓まろし、素焼の土瓶

湯気はまだそこらにふけど、

あてもなやわれの消息。

月夜孟宗の凶

犬蓼の道

犬蓼の花やらむ。

日に照りてこまごまし紅べに、
道も狭せにこぼれ咲さきたり。

その道を、

やうやくに拾ひ歩める

吾が愛児まなごなる。

虫も鳴け、露もあがれよ。

吾が子こそ地には立ちたれ、今日あきらかに。

夕

日天子、

月天子、

りりりと虫は鳴きまする。

子どもは母に添ひまする。
雁かりも野づらに落ちまする。

小謡

たかむら
篁わらべに遊ぶ童は

素肌にて、

さびしかるらむ、一人にて、

前ゆすり、

後あとゆすり、

竹の葉洩れの暑ひき陽を

ちりやちりちり、
ちりやちりちり、
見て楽しめり。

草の葉

ち
わらべ
小さき童のつむりにも
月の光はしたたれり。
草の葉しるき土のうへ、
影は風とし揺りそよぐ。

月光の曲

母の乳ちに添ふみどり児の
小ちさきつむりのめづらしさ。

月の光に白萩の

夜はこぼれて香かにほふ。

地上

竹のはやしは明るくて

秋風のみぞ満ちにける。

今宵こよひまどけき月天子

かぐや姫をか召したまふ。

もくせい

もくせいがにほふよ。

となりからにほふよ。

ひとりであるればにほふよ。

たかむらにこもるよ。

月の光がみちたよ。

胡麻の実の秋

胡麻の実は早くも肥えて、
ふたつづつ茎をはさみぬ。

胡麻の花下べよりちり、

秀ほにのこる、まだほのあかし。

いとなめよ、地は震ふとも、

茎くきだか高うに熟れよ、胡麻の実。

ああ、秋よ、

つくづくと鳴く蟬あれば、

音爆はぜて

飛行機は飛ぶ、かの高天たかあめに。

落栗

いが栗のあをきがうちは

つくづくと鳴く蟬ありき。

栗は落ち、土つちは震へど、

日のあたりつねにかはらず、

落栗をひとりひろはむ。

蛾

かすかなは

白い蛾の

まだ死なぬ翅_{はね}。

みなぎるは

寺庭_{てらには}の

残暑_ひの陽。

秋はやや

曳かれつつある

白い蛾の眼に映るのみ。
はえ

光り、

かげり

息づきつつ。

風と蝶

蝶を追ふ

光る風並。
かざなみ

風並かざなみの

そよぐ青萱。

この道の

はてしなき。

空はあり、

空の奥。

風は追ふ。

蝶を追ふ。

良夜

鮮麗なは良夜の

一二等星。

月のあるのを忘れて

童は飛ばしてゐる竹の蜻蛉を。

いつまでもいつまでも竹の蜻蛉は光つてゐる。

薄にまるまる露の二ふたたま
ぼろんぼろんと何か鳴る。

初秋

身について来た浪の音だよ。
竹の根の曼珠沙華だよ。

花楮

うた

うたはただほのぼのとの、

よいにほひでの、

さいたばかしのはなのやうでの、

しなのたかい、いきづかひでの、

それはさびしいたましひのほほゑみでの、

さうありたいとおもふがの、

みなさまどうぢやの。

花の盛り

花の盛りはちんころぐさの花でさへ、

ただもう、ふんはりとしましての、

よいにほひの、

好すいたらしいよいおいろの、

にくげといふものつゆもない。

花のさかりはよいものう、

わかいうちぢや、

なんでもわかいうちぢやとよ。

閑か

曇り日の

あるかないかのそよ風に、

ほうつほうつと楊やなぎの絮わたが飛ぶわいの、

かはせみの巢ののあたりまで往いたわいの、

かはせみは居をらなんだよ、

ただ、はうせういたちが疱瘡はうせうで寝てゐた。

へちま

小歌風

黄の花の二つや三つや、

棕櫚の葉ずゑに巻きのぼり、

ほつと、はづれて、

咲いさがりたり、

何^{なにばな}花か、咲いさがりたり。

さて、知らぬとも、

すでについたる実^みの形^{なり}の

ふらりひよろりとする実ゆゑ、

おもしろのへちまや、

おもしろのへちまやと、

妻が申しき。

妻が申しき。

秋

鳴が立つ、

鳴が立つ、

ただそれのみの秋でおりやるよ。

おりやるよ、のう、

そこな坊^{ぼう}さま、

いそがしやれよと、風も通つた。

雲水

ああもう秋ぢやな。

一所不住の沙門ぢやで、

山松風も聴いて行かうぞ。

花はかるかや、われもかう、

笹のほとりの女郎花、

ながめながめて見て行かう。

さて、白い

七日か八日かの月も見て、
昼餐ひるげの料しろやいたただかう。
昼餐ひるげの料しろやいたただかう。

豊干

秋が深いで、
虎の瞳も深うなる。
山松風も高うなる。
だがな、寒山、
虎の背なかは温かいぞよ。

しつしつ、温かいぞよ。

唐子売

南京小情

総あげまき角の唐子、唐子よ、

子を売ろよ、売ろよ、子を売ろ。

春の日は永ながや、のどかや、

ふれ売の大きな藺ゐがさ笠や。

黄^きの服の唐子、唐子よ、

かつがれて、籠にゆられて。

春の日は永や、のどかや、
前うしろ傾^{かし}ぐになひや。

幼子よ、唐子、唐子よ、

まろき目を寄せて、集めて。

春の日は永や、のどかや、

売られゆく身とも知らずや。

総^{あげまき}角の唐子、唐子よ、

物^{もの}珍^{めづ}ら、街^{まち}を眺めて。

春の日は永や、のどかや、

風吹けば絮^{わた}の柳や。

選^えりどりよ、唐子、唐子よ、

子を売ろよ、売ろよ、子を売ろ。

春の日は永や、のどかや、

水の江の橋の眼鏡や。

彼

美の、忍従の徳により、
彼は正しく讃ほめられん。

彼はただひとり寂さびつつ、

いや高き「上うへな無とき時」を楽たのしみぬ。

おのづから神に通ひぬ。

冬眠

はつ冬

住みついてゐても、はつ冬

豆柿の点点に来る

鳥のちひささ。

冬晴

わたしは見てゐる、目白のむれを。

鈴なりの豆柿よ。冬晴ふゆばれのあをぞらよ。

わたしは写してゐる、食たべほれてゐる目白の一羽を。

あ、ちよつとお待ち、鉛筆を削ります。

小禽

目白だ。

こぼれるやうな目白だ。

あ、鶇が来た。

目白が散った。

百舌が来た。

鶇が逃げた。

枝を移った、翔かけった、百舌が。

ああ、冬ばれ、

鈴なりの赤い赤い豆柿。

わたしはまた、待つてゐる。
目白を、鴨を、百舌きちを。

十二月三日の薄暮

ちちりちちりと、まだ、
鳴く虫がある。

子はつまづいてはづした
膝つこぶの関節。

月は黄いろに光らぬ
でんとう
電灯の線である。

松風だ、松風だ。

鳥の毛のやうな飛び雲だ。

ざんざんざん

枯枇杷の完すがたき姿、

雀と大きな百舌、

残り陽の孟宗^び

ざさんさ、

めづらしい浪のざさんさ。

ああ、それだけの清明に、いま、

パツと電灯^{でんとう}がついたのである。

ざさんさ

ああ、ざさんさ。

美濃びとに

ほうい ほうい ほうい、

霜が濃こいぞ、鶇こよ。

水郷の早春

黒髪三品

山色連天

葦あしの芽あをむ水みぎはに、

黒髪梳くや子の母、

うなじの白さ、つめたさ、

とほやまゆき
遠山雪のはるけさ。

蜃気満海

黒髪丈たけに濡らして

裳あまの裾しぼる海女あり。

ついたちふつかの月ゆゑ、

ゆふしほさゝる
夕汐騒のかすけさ。

煙霞有情

鼓うちつつ、冴えつつ、

舟にて通ふ沼の女、

芽^{めやなぎ}柳かすむ朝とて

黒髪風になびきぬ。

金粉の靄

馬

旅こころ今日うら安し子を抱きて絵馬の馬など眺めまは
りつ
信州別所北向観音

坊やよ、あの絵馬を見い。

ほうれ、馬が遊んでゐる。

白い馬、

葦毛の馬、

黒い馬、

跳はね立つ馬、

寝^ねてゐる馬、

並んで水をのんでゐる馬、

泳いでゐる馬、

向うの向うを眺めてゐる馬、

ふりかへる馬、

ひとりぼつちの馬、

出てくる馬、

消えてゆく馬、

何千何百とゐる馬、

裾野いつぱいの馬、

馬は馬同志群れてゐる。

風は薄を吹いてゐる。

青空文庫情報

底本：「白秋全集 5」岩波書店

1986（昭和61）年9月5日発行

底本の親本：「白秋全集第四巻」アルス

1931（昭和6）年1月17日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：岡村和彦

校正：大沢たかお

2012年8月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

第二海豹と雲

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>